
御伽草子に見る擬人化表現の意味について
—『玉藻の前』と『弥兵衛鼠』を中心に—

岐阜県美術館 水谷 亜希

室町後期から江戸初期にかけて、「御伽草子」と呼ばれる一群の物語が制作・書写された。その外延は必ずしも明確ではないが、物語の種類は四百を超え、確認されている伝本は、いわゆる奈良絵本・絵巻と呼ばれる手描きのものに限っても約二千点、さらに渋川版「御伽文庫」など版本で流通したものがここに加わる。これらは内容的に、公家物、僧侶物、武家物、庶民物、異国物、異類物の六種に分類されるが、異類物は、動植物や器物が人間的に思考し、話し、行動することを特徴とする物語で、絵画的にも、異類が擬人的に——着衣で、二足歩行をし、人間的な振る舞いをする姿で——表現されることを常とする。

この種の物語的・絵画的な擬人化の意味や機能について、従来、二つの見解が行われてきた。ひとつは擬人化をもっぱら人間のメタファーとして、すなわち「動物等を用いて人間を特殊な方法で描いたもの」として解釈するもので、例えば、網野善彦氏が『十二類絵巻』における十二類軍と狸軍の合戦を、京の侍と土民・悪党の戦いとして読むような場合がこれにあたる。最近では、田口文哉氏が『弥兵衛鼠』（慶応義塾図書館蔵）に登場する鼠の擬人化レベルの差異——人間化された姿と動物本来の姿の対立——を、垂直的に、身分の上昇／下降（成功／失敗）として解釈したことなどが記憶に新しい。もうひとつは、擬人化を比喩的にではなく、字義通りに受け取ろうとするもので、例えば、大西廣氏が《鳥獣戯画》甲巻（高山寺蔵）に、「人獣一体の神話と祭儀」を読み取るような場合がこれにあたる。

本発表の課題は、御伽草子の異類物を代表する『玉藻の前』（京都大学付属図書館蔵）と『弥兵衛鼠』において、異類が、いつ、どのような場合に擬人化されるのかを検討することで、擬人化表現のもつ意味や機能——なぜ、何のために擬人化されなければならないのか——について、メタファー的な解釈ではない方向で再考することにある。

そのために、次のような手順で議論を進めるものとする。第一に、異類婚姻譚である『玉藻の前』において、狐は、人間に化けているか否か——「化生」という状態にあるか否か——を表すために、人間の姿と動物の姿の二種類に描き分けられることを指摘する。第二に、報恩譚である『弥兵衛鼠』において、鼠は、人間界／異界（鼠の浄土）、そして両者を繋ぐ境界（塔・夜）にいることを表すために、三段階の擬人化の程度を付与されていること、したがって鼠の擬人化レベルの差異は、水平的な世界間の移動——異界／境界／人間界の交通——の指標として解釈される可能性があることを指摘する。もちろん、このような擬人化の解釈は、メタファー的な解釈と二者択一の関係にあるわけではない。中世から近世への過渡期という、化生や異界の存在がある程度の現実味を帯びていた時代において、擬人化表現はメタファー的にも、字義通りにも受け取られた可能性があるからである。